

3 遺 構

(1) 調査前の地形と基本層序

鐘 楼 調査前の鐘楼には低い土壇が残っており、地表に9基の礎石の上面が露出していた。また興福寺では造営にともなって寺域を大規模に造成したことが、これまでの発掘調査で確認されている。鐘楼の西に位置する西室や北円堂院の発掘調査では、基盤となる層が黄褐色から赤褐色の礫層とされ、中金堂院や南大門の調査でも同様の層が確認されている。南大門では基壇の断割調査で、一連の基盤層が北西から南東に向けて落ち込むことを確認している。中門から中金堂院東面回廊にかけても同様の谷地形があることから、寺の造営に先立って南北方向の谷筋を埋め立てて整地をおこない、平坦面を造成したことがわかる。また、同様の層は北円堂西側でも西に向けて落ち込み、その上に暗褐色粘土・黄褐色粘質土や砂質土で版築をとまなう入念な整地がほどこされている（『概報Ⅴ』2010年、『概報Ⅵ』2012年、『概報Ⅶ』2016年）。

鐘楼地区の基本層序は、基壇上においては上から、①表土が10cm以下、②近代以降の盛土が10～40cmの厚さで堆積しており、その直下で礫を多く含む黄褐色粘質土・砂質土からなる基壇土を検出した。基壇土上面の標高は、場所により削平を受けているため95.7～96.1mと幅がある。

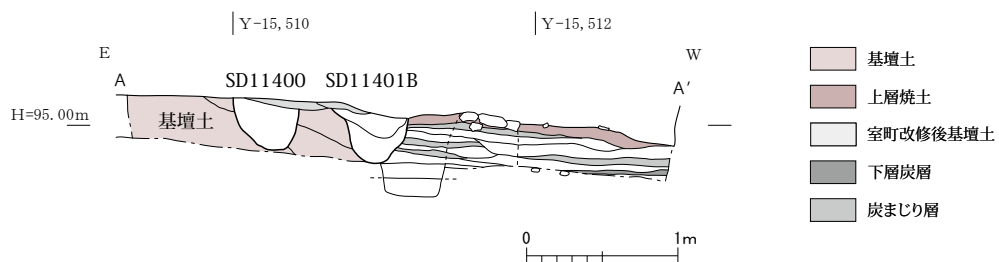
基壇周囲では上から、①整備盛土が約20cm、②近世以降の遺物包含層もしくは近代以降の盛土が10～30cm、③古代から中世の遺物包含層が20～30cm、最下部に④創建当初とみられる整地土が約10cmの厚さで堆積する（第2図）。③遺物包含層はさらに細かく区別でき、褐色砂質の整地土と炭を多く含む層が交互に堆積する状況が認められる。なお、基壇西側を中心に③の上面を厚さ4cm未満の赤色焼土塊（『概報Ⅷ』の「上層焼土」）を多く含む層と炭化材層が覆う。また、④の整地土の上面には基壇北東を中心に最大厚5cmほどの炭層が堆積する（『概報Ⅷ』の「下層焼土」。炭化物主体の堆積物であり以下では「下層炭層」と呼ぶ）。

創建当初の整地の下位には、粘土塊を含む橙褐色砂礫層が70cm以上厚く堆積する。この層は周辺の発掘調査で確認していた黄褐色から赤褐色の礫層と同じものの可能性が高い。粘土塊、シルト、砂、礫を混合した層であり、人為的な整地層の可能性が高いため、以下、これを基盤整地土と呼ぶ。

標高は上層焼土上面で95.5m、下層炭層上面で95.2～95.3m、基盤整地土上面は基壇中央部で95.3m、基壇周囲では95.2m前後で基壇中央部分がわずかに高い。

なお、西南区画全体および東南区画の559次E区を除く範囲については、遺構保護の観点から上層焼土および相当層上面までの調査とした。

東金堂院 西面回廊推定地の東金堂と五重塔の正面付近では、門や回廊の礎石、基壇の高まりは残っ



第2図 鐘楼基壇西縁（559次D区南壁）断面図 1:50

ておらず、現在は砂利敷舗装のほぼ平らな空間が広がる。南面は現在の興福寺の南限を兼ねており、石垣の上に板塀が設置されている。築地塀の礎石や基壇の高まりは目視で確認できない。東金堂北の北面回廊推定地では、回廊の礎石が、北側柱筋で2基、南側柱筋で4基が地上に露出している。これらの礎石のさらに東側の649次調査区周辺は、北へ向かって低くなる斜面地となっており、多量の瓦を廃棄してできた高まりの北裾にあたる。

五重塔正面の625次北区の基本層序と遺構検出面は、現在の砂利敷舗装を除去した、標高約95.0m(地表下約10cm)である。調査区北端では砂利敷が15cm程度と分厚く、その下の褐色土を除去した、標高約95.1m(地表下約20cm)で遺構を検出した。遺構検出面は、門および回廊部分では赤橙褐色土上面、調査区東端では炭まじりの黄褐色土上面となる。

東金堂院の西南隅にあたる625次南区では、表土および近現代の包含層を除去した、標高約95.4m(地表下5～10cm)で近世・近代の遺構を検出した。調査区南端の南面築地塀もこの標高での確認となる。調査区北半では、それらの下に厚さ60cm程度の近世の遺物包含層がある。これを除去した、標高94.4～94.6m(地表下60～80cm)が古代の遺構検出面である。

東金堂正面の640次北区では、調査区中央の西面北門と西面回廊の基壇上では、上から小砂利混じり灰黄色土(5cm、現在の舗装)、明褐色砂質土(15cm、近代の盛土)、礫混じり褐色砂質土(3cm、近世～近代の舗装)があり、その直下で明黄褐色粘質土の基壇土を検出した。基壇の東西では、礫混じり褐色砂質土まで基壇上と同様の堆積状況を示し、その下では上から灰褐色砂質土(5cm、近世～近代の盛土)、小礫混じり暗赤褐色砂質土(3cm、中世～近世の舗装)、褐色砂質土(10cm、整地土)があり、その直下で礫混じり明褐色砂質土の基盤整地土(70cm以上)を検出した。遺構検出は基壇上面では標高約95.1mで、基壇の東西では整地土上面の標高約95.2mと基盤整地土上面の標高約95.1mでおこなった。

また、西面北門中心の基壇土直下では標高約94.8m、調査区東南隅では標高約94.4mで部分的に明褐色粘質土の地山を確認した。調査区の西辺に沿って後世に石列が築かれているが、この裏込土の直下では、調査区の南から約4mの標高約94.7mで、地山と基盤整地土の境を確認した。調査区東北隅では標高約94.2m、調査区中央の東西畦南辺の東側2ヵ所では標高94.3～94.5mまで掘削しても基盤整地土が堆積しており、地山を確認できなかった。

東金堂院の南面にあたる640次南区の南半では、表土(約10cm)および近・現代の包含層(30～40cm)を除去した標高約96.1mで、浅黄色砂質土からなる築地塀の壁体と基部を検出した。その下層には創建当初の基盤整地土とみられる黄橙色砂質土(厚さ30cm以上、標高約95.5m)が広がる。

調査区の北半では、表土(約40cm)、にぶい黄褐色砂質土(25～35cm、近世以降の遺物包含層)、にぶい黄橙色砂質土(10～20cm、瓦を多く含む)の下層に、古代から中世の遺物包含層が堆積する。この層は上から灰黄褐色砂質土(15～25cm)、炭片を多く含む黒褐色砂質土(約5cm)に分層でき、銅製品や瓦片が多く出土した。その下層に広がる黄橙色砂質土(標高約95.3m)は、築地塀下層で確認した創建当初の基盤整地土と一連の層で、この上面で遺構検出をおこなった。

東金堂の北側、649次調査区の基本層序は以下のとおりである。回廊基壇上は地表面から表土と近現代の整備盛土(15～40cm)、灰色砂質土(40～55cm、以下、遺物包含層)、褐灰色砂質土(5cm、以下、回廊基壇積み足し土)と続き、黄橙色粘質土(以下、回廊基壇土)となる。褐灰色砂質土上面で礎石据付穴を検出したので、褐灰色砂質土を回廊基壇積み足し土と判断した。遺構検出は、回廊基壇積み足し

土上面（標高約 95.5 m）と回廊基壇土上面（標高約 95.5 m）でおこなった。基壇上の遺物包含層は、瓦と土器を多量に含み、部分的に焼土・炭化物を含む範囲がある。

回廊の北側では、地表面から表土と近現代の整備盛土（40cm）、灰色砂質土（45cm、遺物包含層）、黄褐色粘質土（20cm、基盤整地土）、にぶい黄橙色砂質土（30cm、基盤整地土）、凝灰岩片が混じる明黄色砂質土（10cm、基盤整地土）と続き、礫混灰褐色砂（30cm 以上、地山、標高 94.2m）となる。遺構検出は、基盤整地土の黄褐色粘質土上面（標高約 94.6 m）でおこなった。なお、調査区東北隅では基盤整地土である黄褐色粘質土が 1 m 以上、少なくとも標高約 93.6 m まで続く。回廊の南側は地表面から表土（5 cm）、灰茶色砂質土（75～90cm）、焼土や炭が混じる黄褐色砂質土（20cm）、褐灰色砂質土（10～20cm、遺物包含層）と続き、礫混じりの黄橙色粘質土（基盤整地土）となる。遺構検出は基盤整地土の黄橙色粘質土上面（標高約 95.5m）でおこなった。なお、調査区中央付近では礫混じりの黄橙色粘質土を標高約 95.8m で検出したことから、本来の回廊南側の整地土の標高は遺構検出面（標高約 95.5m）よりやや高く、回廊南側の整地土が後世に削平された可能性がある。

（２）鐘樓の遺構

礎石建物 SB11010（鐘樓） 桁行 3 間（約 10.1m、34 尺）×梁行 2 間（約 6.5m、22 尺）の南北棟建物。柱間寸法は、桁行では中央間が 12 尺、両脇間が 11 尺、梁行は 11 尺等間と考えられる（第 5 図）。経蔵とは南北中軸が揃う。残存する 9 基の礎石は三笠安山岩を用いており、長径 1.0～1.9m で柱座などの造り出しは認められない。断割調査をおこなった結果、これらの礎石には据付掘方が認められないため、基壇の構築の過程で設置したと考えられ、また据え直した痕跡もないことから基本的に創建当初の位置を保っているとみられる（第 3・6 図）。基壇外装の改修もほぼ同位置でおこなわれていることと整合的である。

基壇 基壇上面は近世以降にいくつもの攪乱をうけているものの、基壇周縁部の遺構は良好に残存しているためその規模が判明した。基壇規模は南北約 14.5m、東西約 11.1m、基壇の出は各面とも約 2.2m で、経蔵基壇と同規模とみて良い。基壇は、基盤整地土の上に種類の異なる土を積んで構築しているが、版築はおこなわれていない。なお、基壇周囲に雨落溝は認められず、基壇下に掘込地業はおこなわれていない（第 6 図）。

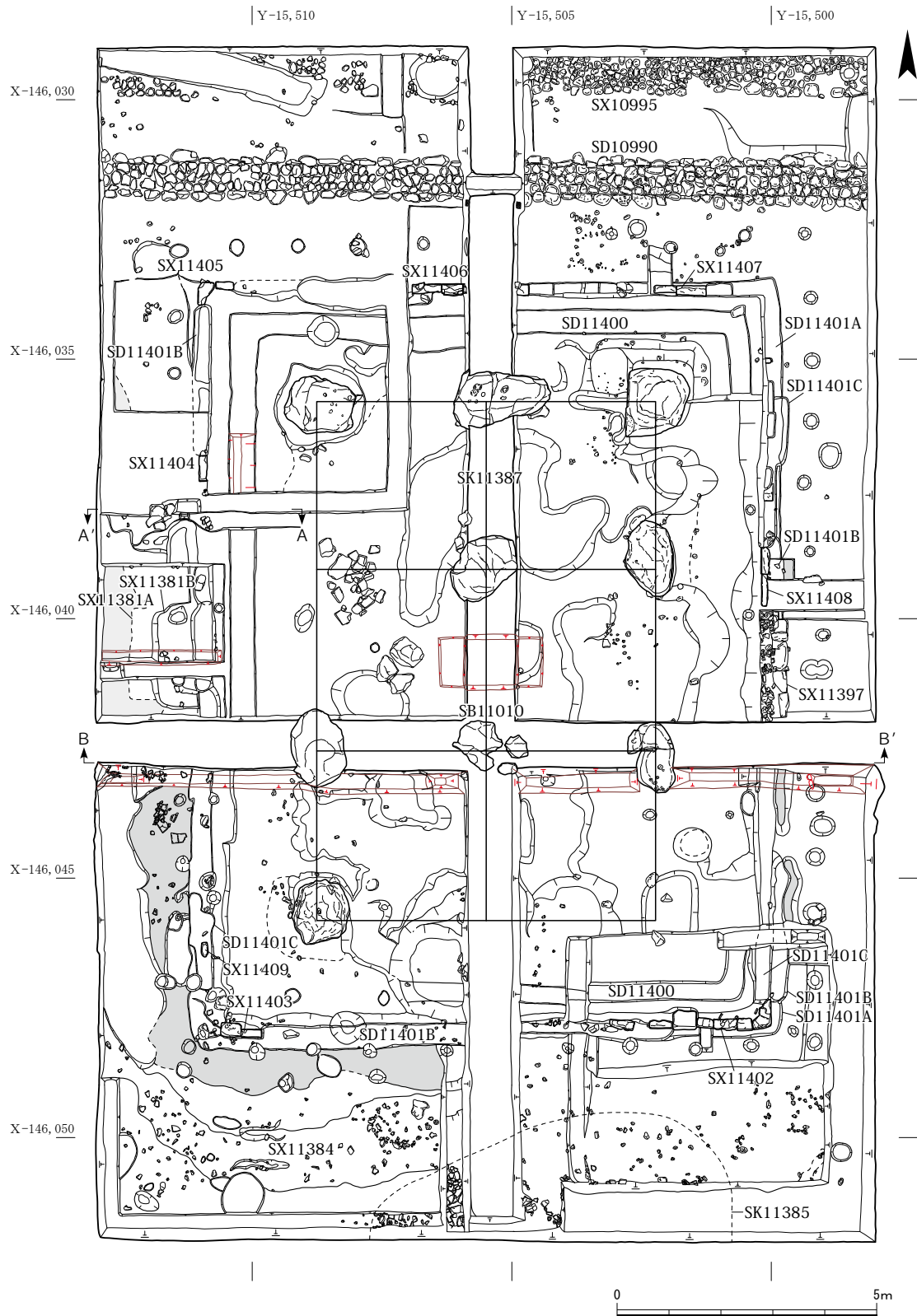
基壇外装 基壇周囲では、享保 2 年（1717）の焼失後も抜き取られずに残置された羽目石が部分的



第 3 図 礎石位置の基壇土（南東から）



第 4 図 羽目石 SX11408（北東から）



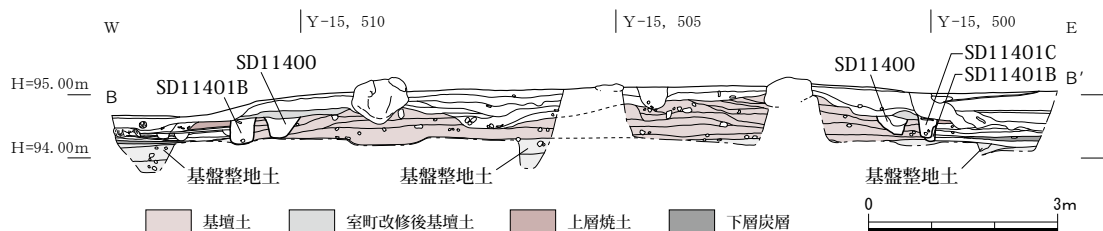
第5図 625次鐘樓遺構平面図 1:120

に残る (SX11402～11409) (第4図)。羽目石の大きさは、幅が30～50cm、厚さ15～20cmである。地覆石およびその抜取痕跡は認められず、羽目石が直接地面に据えられている。羽目石の石材は、大半が奈良市地獄谷付近に産する流紋岩質溶結凝灰岩であるが、北面東部の羽目石 SX11407 の東側1石と南面西部の羽目石 SX11402 の西から2石目は二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質凝灰角礫岩である。

羽目石が失われている箇所では、掘り込み面を違える3条の素掘溝 SD11401A～Cを検出した。羽目石の抜取および据付にともなうものとみられ、掘り込み面および溝の出土遺物、放射性炭素年代(『紀要2021』)からみて SD11401A が平安時代の抜取・据付溝、SD11401B が室町時代の抜取・据付溝、SD11401C が近世以降の抜取溝と考えられ、度重なる焼失をうけておこなわれた各時期の改修に対応すると考えられる。溝には所々で長方形に溝底が深くなる箇所があり、その平面形が羽目石の大きさに一致する。また、南面東部の SD11401A に据えられた平安時代の羽目石列 SX11402 の底面形状も石材ごとに異なる。これらは、羽目石の上面を揃え、石の底面の高さを石材にあわせて調整していたことを意味する。つまり、少なくとも地覆石が平安時代以降には存在しなかったことを示し、これをさかのぼる痕跡も認められなかった。

なお、基壇西面北部で基盤整地土上面に直接据えられた羽目石 SX11404 の外面には薄い黒線が3条認められた。これは焼失時の痕跡が残されたものと考えられ、周辺の整地層の年代からみて、この羽目石は平安時代以来、残置したものの可能性が高い。通常、興福寺創建期の基壇外装には二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質凝灰角礫岩が用いられるとされる。SX11404 は地獄谷産であることからみて、平安時代に据え直された羽目石との推定と矛盾しない。

袴腰地覆石抜取溝 SD11400 基壇上面で検出した、四周を直線的にめぐる幅40～60cm、深さ約30



第6図 SB11010 基壇東西断面図 1:120



第7図 SD11400 とそれを覆う改修基壇土 (北から)



第8図 西面階段 SX11381A・B (西から)

cmの素掘溝。基壇外側の側壁が急角度に立ち上がるため断面形状は逆直角台形状となる（第6図）。当初、基壇西北部以外では平面検出できなかったが、基壇西縁の断面（第2図）と平面観察の所見から、場所によりこの素掘溝を覆う新しい基壇土が存在することが判明した。

この基壇土は上層焼土を掘り込む室町時代の基壇外装据付溝をも覆うことから、室町時代以降に基壇を整備し直したことがわかる。基壇周囲では複数回に及ぶ焼失を示す炭層や焼土とそのたびの整地層が厚く堆積することから、創建以降、中世にかけて基壇は次第に埋没したと考えられるため、室町時代以降に基壇周囲を大きく改修したものと考えられる（第7図）。

この積み足された改修基壇土を部分的に掘削することによって基壇の西北・東北・東南部で素掘溝の延長を確認した。その規模は溝の外々間距離で南北 13.4m、東西 10.1m である。一部を掘削したところ遺物は出土しなかったが、細粒化した凝灰岩片がみられた。

延慶2年（1309）の年紀をもつ「春日権現験記絵」（三の丸尚蔵館蔵）や14世紀に描かれたとされる「春日社寺曼荼羅」（奈良国立博物館蔵）等の絵画資料によれば、興福寺鐘楼の下層部分は袴腰と呼ばれる構造物で覆われている。溝の断面形状が逆台形状になること、凝灰岩片が出土するといった状況証拠から、この素掘溝は袴腰の基礎となる地覆石を抜き取った痕跡とみなせる。

西面階段 SX11381 鐘楼基壇の西面で検出した基壇南北の中心軸にある2時期分の階段痕跡（第8図）。SX11381A は下層炭層 SX11412 が矩形にとぎれる箇所を階段があった位置とみなすもので、幅が約 1.6m、階段の出が約 1.2m である。SX11381B はその後、上層焼土 SX11383 が形成されるまでの間に構築されたもの。想定位置に段状に残る裏込土とみられる土から存在を推定したもので、幅が約 1.8m、階段の出が約 0.9m 以上である。いずれも耳石の抜取痕跡等は確認できていない。階段も複数回にわたり改修されたことがわかる。

東面階段 SX11397 鐘楼基壇の東面で検出した、幅 1.5m 以上の階段。階段の出は 0.6m 以上である。花崗岩の割石を用いており、最下段のみが残る。古代から中世の階段は西側に位置する僧房（西室）に向けて設置されたが、この階段は東側を向いていること、階段の中心が基壇の南北中軸から南にずれていることからみて、僧房廃絶後に設けられた可能性が高い。

東西溝 SD10990 基壇の北方で検出した、幅約 50cm、深さ約 10cmの東西石組溝。側石・底石に長径 10～50cmの玉石を用いる。559 次調査での検出分とあわせて長さ約 15m 分を確認したが、さらに調査区外に延びる。経蔵の北方でも、伽藍中軸に対し、ほぼ対称位置で同様の石組溝がみつまっている（『概報Ⅶ』）。最下層の整地と同時に敷設されていることから創建期にさかのぼり、講堂周辺の排水溝としての機能をもつものと考えられる。

玉石敷 SX10995 東西溝 SD10990 の北方で検出した、幅 80cm以上の東西方向の玉石敷。長径 10～20cmの玉石を敷き詰めており、南側に見切りの石を配置する。北端は確認できておらず北方の未調査区に続く。経蔵の北方でも、伽藍中軸に対しほぼ対称位置で玉石敷を検出しており（『概報Ⅶ』）、主要堂塔を結ぶ通路と考えられる。東西溝 SD10990 とともに、平安時代以降、鎌倉時代までに埋没した。

瓦溜 SX11384 鐘楼基壇の南西で検出した、幅約 1m、長さ約 7m の帯状の瓦堆積。上層焼土面上に堆積することから、室町時代の再建の契機となった焼失にともなう落下瓦の可能性がある。

廃棄土坑 SK11385 基壇の南側で検出した、東西 7m 以上、南北 2m 以上の瓦を多く含む土坑。平安時代の土師器皿や軒瓦を含むことから、この時代の焼失時の片付けにともなう廃棄土坑であろう。

(3) 東金堂院の遺構

i 625 次北区 (西面南門、西面中回廊)

西面南門 SB11420 調査区中央で礎石据付穴を7基検出した(第10・11図)。一辺60～90cmの隅丸方形で、深さは10cm程度を残すのみ。中央の2基では抜取穴も確認した。門と五重塔の中軸が概ね一致し、その五重塔の推定心のX座標(X=146,149.1)を参考に南北対称に復元すれば、SB11420は桁行3間、梁行2間の礎石建ちの八脚門となる。柱間寸法をみると、梁行は8尺等間となるが、桁行については中央間が約3.2m(11尺)、脇間が約2.6m(9尺)となる。

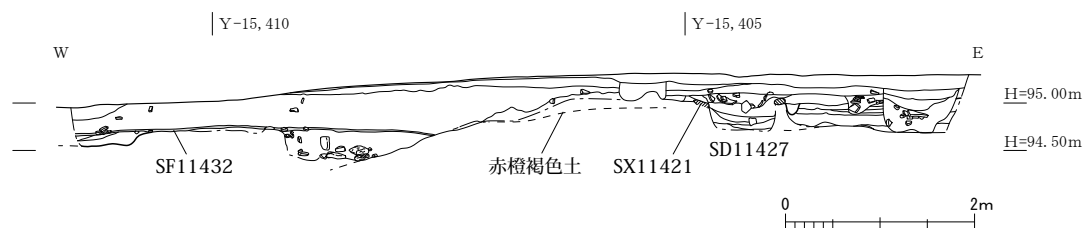
礎石の据付と抜取は1回分のみしか認められない。創建時の礎石をそのまま利用し続けたと考えるのが自然だが、焼損にともなう改築・改修によって創建時の痕跡が失われた可能性も否定できない。事実、門の基壇は相当程度に削平を受けている。

門の基壇 基壇は赤橙褐色土を削り出して造り、凝灰岩製の基壇外装をとまう。基壇の規模は、南北約10.6m、東西約7.7mと推定される。基壇の出は、北面が約1.0m、東面が約1.5m。基壇土は残っておらず、残存する基壇の高さは約15cmである。

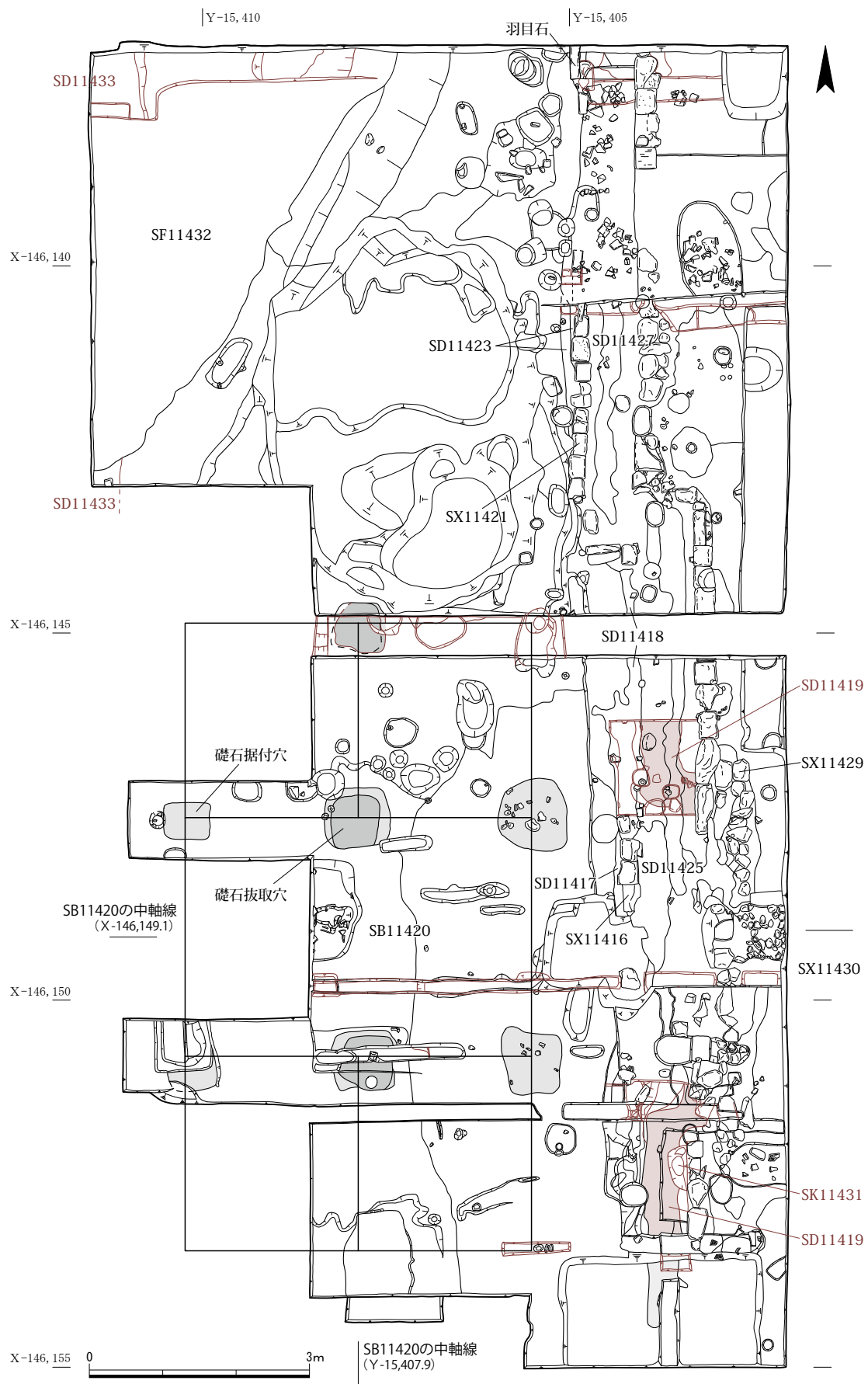
基壇外装は、東面で凝灰岩の地覆石 SX11416 を確認した。原位置を保つ地覆石は5ないし6石のみだが、一部で据付溝 SD11417 を確認できた。東南隅は攪乱により失われていたが、東北隅はよく遺存しており、細長い地覆石を1石配置することで回廊の基壇よりも約75cm幅を広げる。この東北隅の地覆石の内側および底面に炭混じりの焼土が認められるとともに、下層の土坑 SK11431 から中世の土師器や瓦が出土しているので、一連の基壇外装は創建期のものではなく、焼損にともなう中世の再建・改修後の姿と判断できる。廃絶の時期は、西面中回廊の東雨落溝 SD11427 の埋土に近世の瓦が含まれない点や絵画資料が参考となる。また、地覆石の抜取溝 SD11418 を検出し、そこにも炭が混じる。なお、羽目石はすべて失われているが、地覆石上面の風蝕差から、羽目石の位置が判明した。地覆石の凝灰岩は、地獄谷産を主として、二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質凝灰角礫岩も一定量認められる。

南北溝 SD11419 再建・改修後の門にともなう階段は確認できなかったが、下層で階段痕跡を確認した。門 SB11420 の東側2ヵ所で、幅52cmほどの南北素掘溝 SD11419 を検出した。50cmほど東へ張り出し、張り出しの南北距離は約4.4mである。SB11420 のほぼ中央で東側へと張り出すので、SB11420 の階段の地覆石(最下段の踏石)を抜き取った溝とみなせる。階段の幅は、SB11420 の中央間よりも若干広くなる。中世以前の階段で、創建期にさかのぼる可能性もある。

南北溝 SD11425 門 SB11420 の東雨落溝。門基壇の地覆石 SX11416 に接して設けられ、溝の幅は76cmである。東側石は地獄谷産の流紋岩質溶結凝灰岩を主として、一部に二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質角礫岩もみられる。埋土には中世の瓦を含む。



第9図 625 次北区北壁土層図 1:80



第 10 図 625 次北区遺構平面図 1:80

西面中回廊の基壇 北面回廊における既往の調査結果により、東金堂院回廊は礎石建ちの単廊と判明している。しかし、調査区北半には近現代の大きな攪乱があり、回廊基壇の削平も著しく、回廊礎石据付穴や抜取穴は検出できなかった。

門の基壇と同様に、回廊の基壇も凝灰岩製の基壇外装をともない、基本的には赤橙褐色土を削り出して造る（第9図）。ただし、調査区北側には北東から南西にのびる谷筋があり、調査区北端はその谷筋の東肩付近にあたる。この谷筋を礫混黄褐色土（基盤整地土）で埋めており、一部赤橙褐色土上にもおよぶ。

基壇外装は、西側では検出できなかったが、東側で地覆石 SX11421 を確認した（第9図）。長辺約 45cm、短辺約 30cm を標準として大小ある。厚さはいずれも 10cm 程度。また、羽目石も一部残るが、高さ 10cm 程度を残すのみである。地覆石・羽目石ともに凝灰岩製で地獄谷産を主とするが、調査区北端の羽目石は二上山産である。地覆石の設置には据付溝 SD11423 をともない、部分的に新旧 2 時期の据付溝を確認できた。地覆石の大きさは不揃いである。いずれの埋土にも炭を含み、据付溝 SD11423 に含まれる炭化物の放射性炭素年代測定の結果によれば（『紀要 2021』）、基壇外装の地覆石 SX11421 は平安時代後期以降に再建・改修したものと判断できる。

南北溝 SD11427 西面中回廊の東雨落溝。凝灰岩製の側石をもち、底石はない（第9・12図）。場所によって幅に広狭あるが、内法で幅 60cm 前後。門 SB11420 の東雨落溝 SD11425 よりも狭い。埋土からは古代や中世の瓦が出土。近世の瓦を含まないので、近世までには機能を停止したとみなせる。

南北溝 SD11433 調査区西端で検出した南北素掘溝。東肩のみ検出し、残存の深さは 10cm のみ。位置からみて、西面回廊の西側基壇外装抜取溝の可能性がある。

南北石列 SX11429 門 SB11420 の東雨落溝 SD11425 の東側で検出した。南北約 5m にわたって 2



第 11 図 625 次北区全景（北西から）



第 12 図 西面中回廊東雨落溝 SD11427（北から）

列に石を並べる。SD11425 の東側石および東西石敷 SX11430 と重複し、SD11425 よりも新しく、SX11430 よりも古い。門の中央間を意識して敷かれたようである。

東西石敷 SX11430 調査区中央の東端で検出した、幅 80cm の東西石敷。既往の調査で確認しており（『防災報告』）、やや大ぶりの石を両側縁にならべ、そのなかに直径 10 ～ 15cm の円礫を敷き詰める。五重塔正面にある天文 4 年（1535）銘の燈籠へとつづき、燈籠よりも古いとされる。門 SB11420 と五重塔とを結ぶ位置にあるので、門から五重塔へといたる参道であろう。

土坑 SK11431 調査区東南部で検出した土坑。南北約 60cm で、東西 25cm 以上となる。門 SB11420 の東雨落溝 SD11425 の東側石と重複し、それよりも古い。中世の土師器や瓦が出土した。

ii 625 次南区（西面南回廊、南面築地塀）

西面南回廊 SC11440 調査区中央および北壁で 4 基の礎石据付穴を確認した（第 13・14 図）。据付穴は不整形で、一辺ないし直径 1.2m 程度。底に根石を敷き詰める。礎石建ちの単廊で、柱間寸法は桁行・梁行ともに約 3.0m（10 尺）。回廊心と門 SB11420 の心とは大きくずれ、回廊と門の取付構造については課題である。

南北溝 SD11441 調査区東端で検出した南北素掘溝。かろうじて西肩を検出できた程度である。西面回廊 SC11440 との位置関係からみて、基壇外装の抜取溝の可能性がある。

南面築地塀 SA11450 調査区南端で検出した、東西方向の築地塀。東金堂院の南面区画施設であるとともに、寺城南限の区画施設でもある。塀の北縁の一部で積み土を検出できたにすぎず、調査区の南縁から 1 m ほどの位置で崖状に切り崩されているため、本来の築地の基底幅は不明。褐色の築地積土は、礎石 SS11445 を境に上下 2 層にわかれ、上層は平安時代ないし中世に積み足されたもの。下層は奈良時代の積土である。

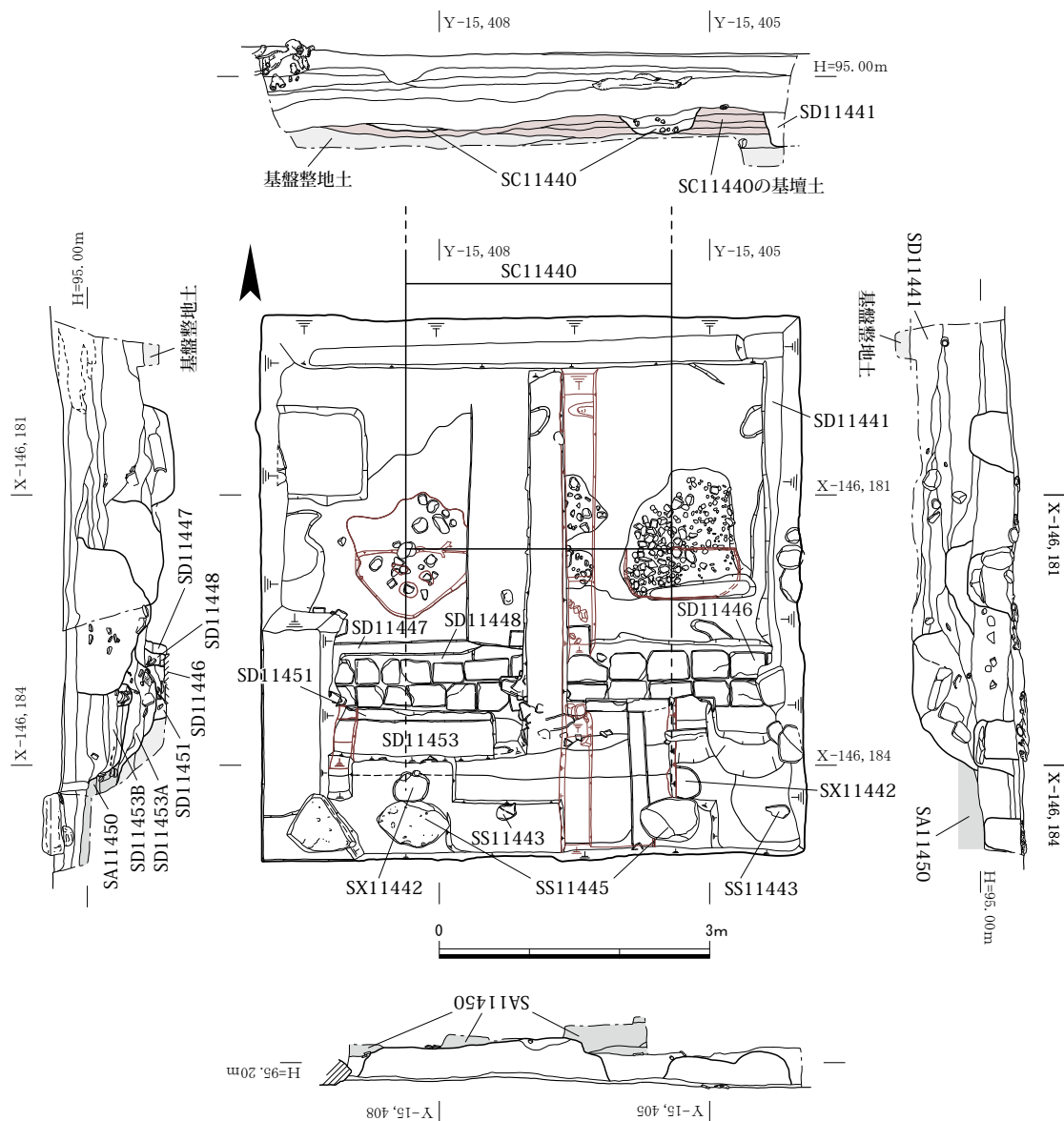
平面では検出できなかったが、西壁で確認できる溝状の落込みは SA11450 の北雨落溝の可能性がある（東西溝 SD11453）。2 時期がみられ、SS11445 の上下で新旧にわけた築地積み土の理解とも整合する。上層の SD11453B からは鎌倉時代の土師器が出土した。

礎石 SS11445 南面築地塀 SA11450 の上層積土を除去したところで検出した、約 3.0m（10 尺）間隔で東西にならぶ 2 基の礎石（第 15 図）。長径 70cm 程度。西面南回廊 SC11440 と柱筋が揃い、南北の間隔も約 3.0m（10 尺）となる。SC11440 との位置関係からみて、南面築地塀に開く門の礎石であった可能性もある。

柱穴列 SX11442 礎石 SS11445 の北側に接して東西にならぶ、2 基の平面円形の掘立柱穴。心々間距離は約 3.0m（10 尺）で、検出面は SS11445 と同じ。直径約 40cm、残存の深さ 30cm ほど。柱穴の断面は斜めに傾かず、ほぼ垂直。SS11445 と併存すると考えられる。

小礎石 SS11443 礎石 SS11445 の柱筋上に東西にならぶ、2 基の小さな礎石。長辺 20cm ほどの板石で、心々間距離は約 3.0m（10 尺）。検出面は SS11445 および柱穴列 SX11442 と同じ。

東西石組溝 SD11446 調査区中央で検出した、凝灰岩の切石を組んだ東西溝（第 15 図）。SD11447 はその据付溝。底石を 2 列に敷き、その上に側石を立てる。側石はほとんど抜き取られており（SD11448・11451）、南側 3 石を残すのみ。長さ 45cm、高さ 30cm、厚さ 15cm 程度。底石は平面長方形で、いずれも長辺 45cm、短辺 30cm 程度を基本とする。15cm（5 寸）を単位とする規格材だろう。底石の配列は東半に比べ西半では大きさにもばらつきがあり、目地も通らない。また、北列西端の底石には仕口が



第 13 図 625 次南区遺構平面図・土層図 1:80



第 14 図 625 次南区全景（北から）



第 15 図 625 次南区南半の遺構検出状況（北東から）

あり、西端の側石も北辺上角を欠く仕口があるので転用材とみられる。溝の埋土から平安時代前期の土師器が出土したことから、平安時代の石組溝と考えられる。

東西溝 SD11455 調査区中央で検出した、幅 65cm 程度の東西素掘溝。検出面は東西石組溝 SD11446 よりも上層であり、埋土に中世の瓦や土師器を含む。

iii 640 次北区（西面北門、西面北回廊、西面中回廊）

西面北門 SB11600 礎石の据付穴・抜取穴を 8 基分検出した（第 16 図）。いずれも一時期分のみ確認した。桁行は 3 間で総長が約 8.6 m（29 尺）、梁行は 2 間で総長が約 4.7 m（16 尺）となる。柱間寸法は、桁行が中央間約 3.3 m（11 尺）、両脇間約 2.7 m（9 尺）で、梁行が約 2.4 m（8 尺）等間となる。八脚門であったと考えられる。間口の中心は X-146,101.5 ほどで東金堂とほぼ揃い、棟通りは Y-15,407.9 ほどで 625 次北区で検出した西面南門 SB11420 とほぼ揃う。なお、後述するように、側柱筋から基壇外装および雨落溝までの距離から、軒の出は 5.5 尺以上あったと想定できる。

礎石据付穴の全形を確認できた西北隅の 1 基は直径約 90cm の円形で、据付の深さは 20cm あまりを残すのみである。埋土は灰褐色や明褐色の砂質土である。ここには拳大ほどの根石が残っていた。

西面北門の基壇 基壇土は、長方形土坑 SK11645 の北壁で断面観察をおこなったところ、標高約 94.8 m の地山上に 30～40cm 積まれていたことを確認した。掘込地業および版築がおこなわれた様相は確認できなかった。また、基壇土が積み足された様相も確認できなかった。

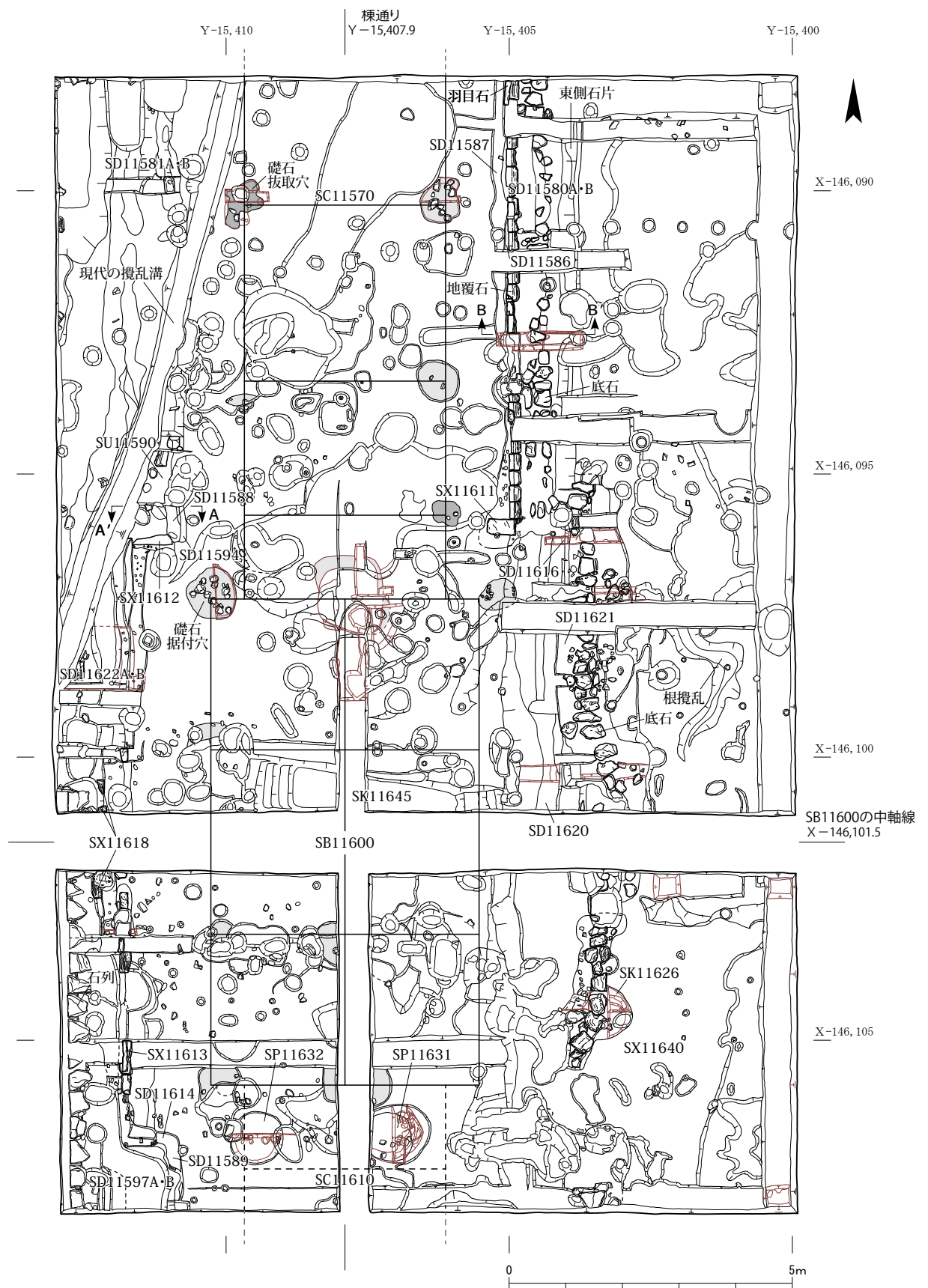
基壇外装にともなう遺構としては、北辺東で地覆石 SX11611（見付 60cm、見込 27cm）を、北辺西で地覆石 SX11612（見付 68cm、見込 18cm）を、西辺南で基壇外装の石列 SX11613（見付 25～60cm、見込 10～20cm、成 12～24cm）を、南辺西で基壇外装抜取溝 SD11614（幅 17cm、深さ 5 cm）を検出した。SX11611 には奈良市地獄谷産の流紋岩質溶結凝灰岩、SX11612 には泥岩、SX11613 には地獄谷付近に産する流紋岩質溶結凝灰岩、細粒花崗岩、二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質凝灰角礫岩の切石が用いられる。SX11611 の東辺は、門と回廊廃絶後に敷設された素掘溝 SD11620 の掘削により滅失している。

北辺西と南辺西に残る SX11612 と SD11614 から、基壇の南北規模は約 10.8 m（36.5 尺）を測る。東辺の位置は、SD11620 や根攪乱 SX11640 で破壊され判然としなかった。SB11600 の棟通りから対称形であるとすれば、東西の基壇規模は約 8.0 m（27 尺）に復元できる。SB11600 の側柱筋から SX11613 の外縁までの距離は約 1.6 m（5.5 尺）であり、軒の出はこれ以上と考えられる。

基壇の西辺中央から約 40cm 西では、西階段の地覆石と考えられる凝灰岩切石 SX11618 を南北幅約 2.1 m 分を検出した。3 石あり、北の 1 石が奈良市地獄谷付近に産する流紋岩質溶結凝灰岩、ほか 2 石が二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質凝灰角礫岩である。残りの良い南の 1 石は見付 32cm、見込 18cm を測る。想定される基壇の東辺中央付近の外（東）側でも、部分的に階段の積み土と思われるにぶい褐色砂質土を検出した。

これらの基壇外装や階段にともなう遺構は、西面北回廊 SC11570 の検出状況などから、鎌倉時代初頭以降の再建にともなうものと考えられる（上層）。ただし、SX11613 の中には地覆石と羽目石が一体の特異な形状の石材があり、転用材とみられ、再建後に改修された可能性も考えられる。

想定される東辺の位置で部分的に掘削をおこなったところ、下層の地覆石抜取溝 SD11616 を検出した。幅 15cm、深さ 7 cm で、埋土はにぶい褐色砂質土である。上層の基壇外装は、下層の位置をほ



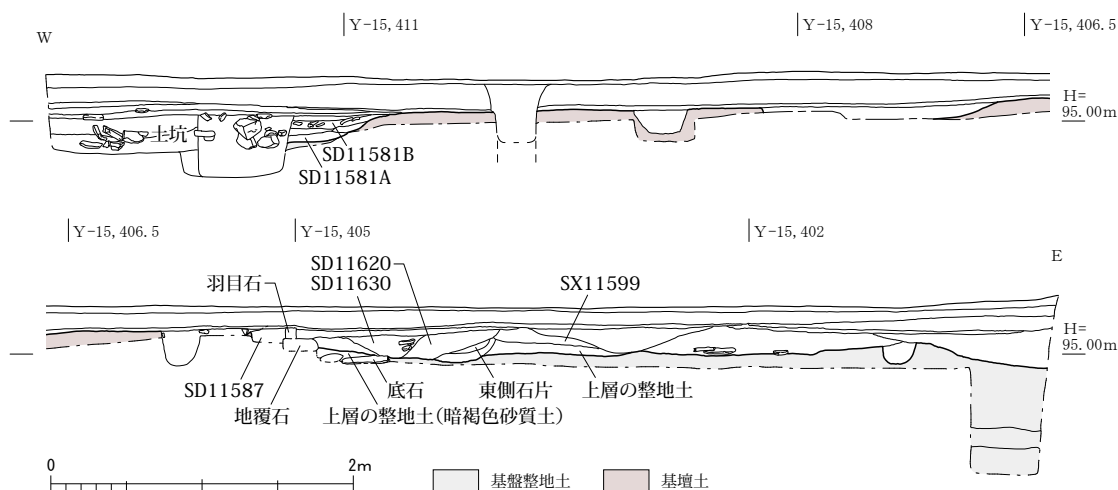
第16図 640次北区遺構平面図 1:100

ば踏襲して設置されたとみられる。

西面北門の雨落溝 基壇の東辺と西辺のすぐ外側で、雨落溝を検出した。基壇の外形に沿って屈曲し、西面回廊の雨落溝に接続する。後述する西面回廊と同様に、少なくとも2時期の変遷がある。

上層東雨落溝は、素掘溝 SD11620 などによって大半が滅失しており、判然としなかった。下層東雨落溝 SD11621 は、側石の据付・抜取溝が未検出であるが、底石を検出した。この石材は、西面北回廊 SC11570 の下層東雨落溝 SD11580A の底石と一連に続くため、雨落溝の底石と考えられる（第18図）。底石は幅 10～50cm で、自然石の三笠安山岩や細粒花崗岩を主体とする。底石は、基盤整地土を掘り込んで据えられているものがあり、奈良時代の創建期に遡る可能性がある。SD11621 の内法幅は、SD11616 の東辺から底石の東辺まで約 90cm（3 尺）を測り、少なくともこれ以上であったと考えられる。なお、底石の下で、円形の土坑 SK11626 を検出した。直径 1.0 m、深さ 13cm で、埋土はにぶい褐色砂質土である。

上層西雨落溝 SD11622B は、後世に築かれた石列や現代の攪乱溝によって大半が滅失していたが、褐色砂質土の埋土を部分的に確認した。南端付近の埋土は、西面中回廊 SC11610 の上層西雨落溝 SD11597B と一連で、SD11597B から出土した鎌倉時代～室町時代の土師器などが上層の廃絶時期を示すと考えられる。下層西雨落溝 SD11622A は、にぶい褐色砂質土の堆積を確認した。幅 80cm、深



第17図 640 次北区北壁土層図 1:50



第18図 SB11600 と SC11750 接続部（北東から）



第19図 SC11570 の地覆石と底石（東から）

さ 7 cmが遺存する。この埋土の一部を部分的に掘削したが、底石や側石は確認できなかった。

西面北回廊 SC11570 礎石の据付穴・抜取穴を 5 基分検出した。いずれも一時期分のみ確認した。梁行 1 間の単廊で、桁行 2 間分を検出した。桁行は北側の 1 間が約 3.1 m (10.5 尺)、南側の 1 間が約 2.4 m (8 尺) となる。SB11600 との取り付けの距離は約 1.5 m (5 尺) である。梁行は約 3.5 m (12 尺) となる。棟通りは SB11600 と揃う。なお、後述するように、側柱筋から基壇外装および雨落溝までの距離から、軒の出は 4.5 ～ 7.5 尺と考えられる。

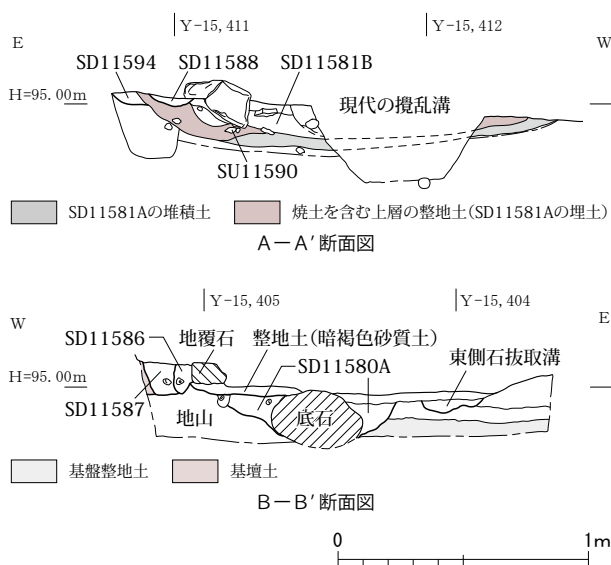
礎石据付穴の一部には、拳大ほどの根石が残っていた。礎石据付穴の全形を確認できた東側柱筋の北の 2 基は、直径約 70cm の円形である。このうち北の 1 基に対して断割調査をおこなったところ、据付の深さは 10cm あまりを残すのみであった。埋土は黄褐色砂質土である。

西面北回廊の基壇 基壇土は、西面北門 SB11600 の基壇土である明黄褐色粘質土と一連に続く様相を平面的に確認した。門と回廊の境で基壇土が積み分けられた様相は確認できなかった (第 18 図)。

基壇の東辺で地覆石を、西辺で地覆石抜取溝 SD11588 を検出した。基壇の東西規模は約 6.2 m (21 尺) を測る。SC11570 の側柱筋から基壇外装外縁までの距離は、東西ともに約 1.3 m (4.5 尺) である。

東辺の基壇外装は、いずれも奈良市地獄谷付近に産する流紋岩質溶結凝灰岩の切石が用いられる。地覆石は、暗褐色砂質土に据えられている。この暗褐色砂質土は、下層東雨落溝 SD11580A の底石を覆うことから、下層が廃絶した後の上層の構築にともなう整地土と考えられる (第 20 図下)。地覆石は 20 石が残存し、見込約 18cm (6 寸)、成約 9cm (3 寸) で、見付はばらつきがあるものの 29cm (1 尺) 前後のものが複数ある。地覆石の上には、羽目石と思われる石材 3 石が残る。これらは見付 27 ～ 40 cm、見込 9 ～ 13cm、成 6 cm 分が遺存する。点在しており、3 石の中に東石に比定できるものがあるかは判断できない。

地覆石の西側では、据付溝 SD11586 を検出した。最大幅 8 cm、深さ 11cm で、埋土はにぶい褐色砂質土である。SD11586 の西側で、下層の地覆石の据付ないし抜取と思われる南北溝 SD11587 を検出した (第 17 図)。幅 10 ～ 30cm、深さ 13cm で、埋土は褐色砂質土である。以上から、上層の基壇外装は下層の位置をほぼ踏襲して設置されたと考えられる。



第 20 図 640 次北区部分断面図 1:30



第 21 図 上層整地土と SU11590 (北から)

西辺の地覆石拔取溝 SD11588 は、南で SB11600 の北辺西の地覆石 SX11612 に接続する。幅 23cm、深さ 3 cm で、埋土は明褐色砂質土である。SD11588 の下には、焼土を含む褐色砂質土（上層の整地土）がある（第 20 図上）。この整地土は東西約 1.6 m の範囲に広がり、西雨落溝 SD11581A・B と重複する。さらに SD11588 の東側で、下層の地覆石据付溝と思われる南北溝 SD11594 を検出した。幅 20cm、深さ 5 cm で、埋土は黄褐色砂質土である。SD11594 は、焼土を含む褐色砂質土以前の遺構である。

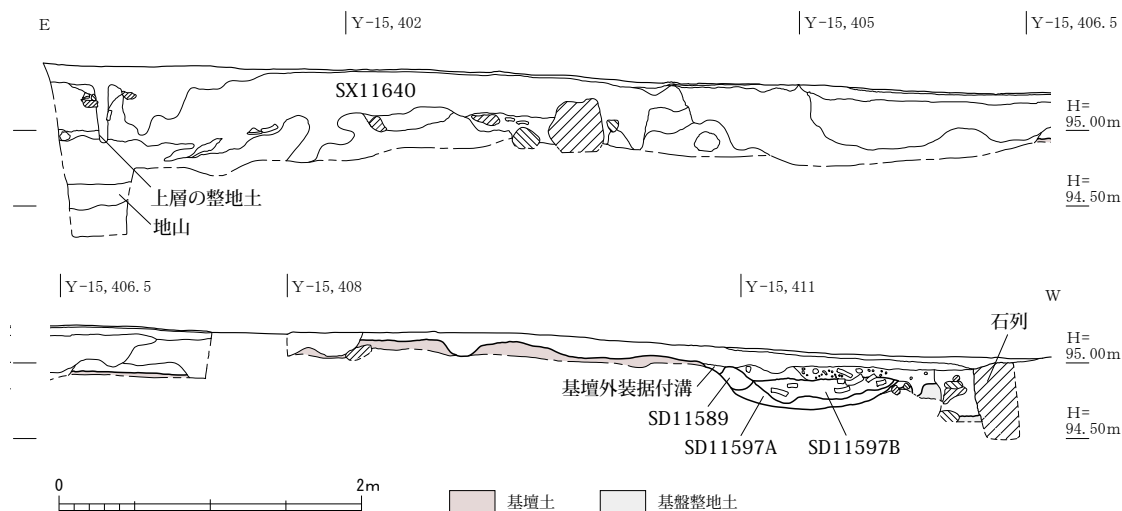
以上から、次に示す基壇外装と雨落溝の 2 時期の変遷がわかる。まず、SD11594 にともなう下層の地覆石が抜き取られた。次に、焼土を含む褐色砂質土で下層西雨落溝 SD11581A が埋められるとともに、整地がおこなわれた。この整地土に上層の地覆石が据えられた。上層の地覆石は廃絶時に抜き取られ、SD11588 として痕跡を残すと考えられる。

西面北回廊の雨落溝 基壇の東辺と西辺のすぐ外側で、2 時期分の雨落溝を検出した。上層東雨落溝 SD11580B の東肩では、側石と思われる風化した凝灰岩片を部分的に検出した。東側石は、下層東雨落溝 SD11580A の東側石拔取溝を利用して据え付けたとみられる。西側石はなく、地覆石が兼ねていたと考えられる。SD11580B の内法幅は約 90cm（3 尺）を測る。SD11580B に底石は敷設されておらず、地覆石を据える整地土（暗褐色砂質土）が雨落溝の底面となっていた（第 20 図下）。SD11580B は、上層の基壇外装に対応した雨落溝と考えられる。

下層東雨落溝 SD11580A は底石を検出し、また東側石拔取溝を断面観察で部分的に確認した（第 20 図下）。SD11580A の内法幅は、下層の地覆石に関連するとみた南北溝 SD11587 から東側石拔取溝まで約 1.0 m を測る。底石は SD11580B の底面となる整地土（暗褐色砂質土）の下で検出した。幅 10～40cm で、自然石の三笠安山岩を主体とするが、一部は平瓦を転用していた。底石の一部が、基盤整地土と地山に据え付けられていることを確認した。この検出状況から、SD11580A は奈良時代の創建期に遡り、一部が改修された可能性も考えられる。

上層西雨落溝 SD11581B は、現代の溝などにより大半が滅失していたが、褐色砂質土の堆積を確認した（第 20 図上）。幅 30cm、深さ 8 cm が残存する。底石や側石は確認できなかった。SD11581B は基壇外装に対応した、鎌倉時代初頭以降の再建にともなうものと考えられる。

下層西雨落溝 SD11581A は、褐色砂質土の堆積（幅 1.3 m、深さ 5 cm）があり、この上層に焼土を含



第 22 図 640 次北区南壁土層図 1:50

む褐色砂質土の埋土（深さ 13cm）がある。焼土を含む褐色砂質土の埋土は、上層の地覆石を構築するための整地を兼ねている。底石や側石は確認できなかった。

遺物集積 SU11590 焼土を含む上層の整地土（褐色砂質土）中で、完形に近い土師器皿や軒丸瓦の瓦当部などの遺物集積 SU11590 を検出した（第 21 図）。西辺は現代の溝により滅失していたが、平面は東西 1.2 m、南北 1.1 m を測る。これらの遺物の年代はいずれも平安時代末～鎌倉時代初頭である。したがって、地覆石抜取溝 SD11588 として痕跡を残す上層の地覆石は、鎌倉時代初頭以降の再建にともなうものと考えられる。

西面中回廊 SC11610 攪乱などにより、礎石にともなう遺構は検出できなかった。しかし、基壇土、基壇外装抜取溝 SD11589、西雨落溝 SD11597A・B を検出したため、西面北門 SB11600 の南に取り付く西面中回廊 SC11610 の存在を想定できる（第 22 図）。

西面中回廊の基壇 基壇土は、西面北門 SB11600 の基壇土である明黄褐色粘質土と一連に続く様相を確認した。門と回廊の境で基壇土が積み分けられた様相は確認できなかった。後世の柱穴 SP11631・11632 で断面観察をおこなったところ、基壇土は基盤整地土の上に積まれており、掘込地業や版築がおこなわれた様相は確認できなかった。

基壇の西辺で、南北溝 SD11589 を検出した（第 22 図）。幅 22cm、深さ 17 cm で、埋土はにぶい黄褐色砂質土である。SD11589 は、SB11600 の南辺西の基壇外装抜取溝 SD11614 から続き、西面北回廊 SC11570 の西辺の地覆石抜取溝 SD11588 と東西位置が概ね揃うことから（Y-15,411.0）、基壇外装抜取溝と考えられる。SD11589 は、下層西雨落溝 SD11597A の埋土を掘り込んでいることから（第 22 図）、上層にともなう遺構と考えられる。SD11589 の東側では、調査区南壁の土層観察で基壇外装据付溝を確認した。幅 14cm、深さ 4 cm で、埋土は明褐色砂質土である。なお、基壇の東辺にともなう遺構は、攪乱により滅失していた。

西面中回廊の雨落溝 基壇東辺の雨落溝にともなう遺構は、攪乱により滅失していた。基壇西辺のすぐ西側で、2 時期分の雨落溝を検出した（第 22 図）。上層西雨落溝 SD11597B は幅 90cm、深さ 15cm で、埋土は土器や瓦を多く含む褐色砂質土である。埋土は西面北門 SB11600 の上層西雨落溝 SD11622B と一連に続く。SD11597B からは、鎌倉時代後半～室町時代前半の土師器皿・瓦器が出土し、上層の廃絶時期を示すと考えられる。底石や側石は確認できなかった。

下層西雨落溝 SD11597A は土層観察で幅 1.2 m、深さ 8 cm で、埋土は褐色砂質土である。この埋土は、上層の基壇外装を構築するための整地を兼ねている。底石や側石は確認できなかった。

iv 640 次南区（南面築地塀）

南面築地塀 SA11450 基盤整地土である黄橙色砂質土上面で硬くしまった浅黄色砂質土（厚さ 35～40cm）を確認した（第 23 図）。遺物をほとんど含まず、創建期の築地塀の積土とみられる。築地塀の南半が調査区外となり規模は不明だが、SP11650 を築地塀の寄柱とし、現在の興福寺南面の石垣から東西溝 SD11660 までの間を築地塀の基部と仮定すると、築地塀の基底幅は約 2.1 m、壁体の外側の犬走りは幅約 90cm に復元できる。

創建期の築地塀の壁体の上層で、中世の土器を含む厚さ 20cm ほどの土層を確認した。中世に改修された築地塀 SA11450B の壁体とみられる。壁体の北面は創建期の築地塀にともなう柱穴 SP11650 よりも 60cm ほど南に位置し、中世以降、築地塀の基底幅が狭められている。壁体の北側では、厚さ

60cmほどの明黄褐色砂質土の層を確認した。中世の土器や瓦片を多く含む。改修時に基部に積み足された盛土とみられる。

また、この積み足した基部盛土の下層で、SA11450B の寄柱または添柱の柱穴を 5 基確認した。柱穴列は少なくとも 2 条あり、新旧の時期差が認められた。

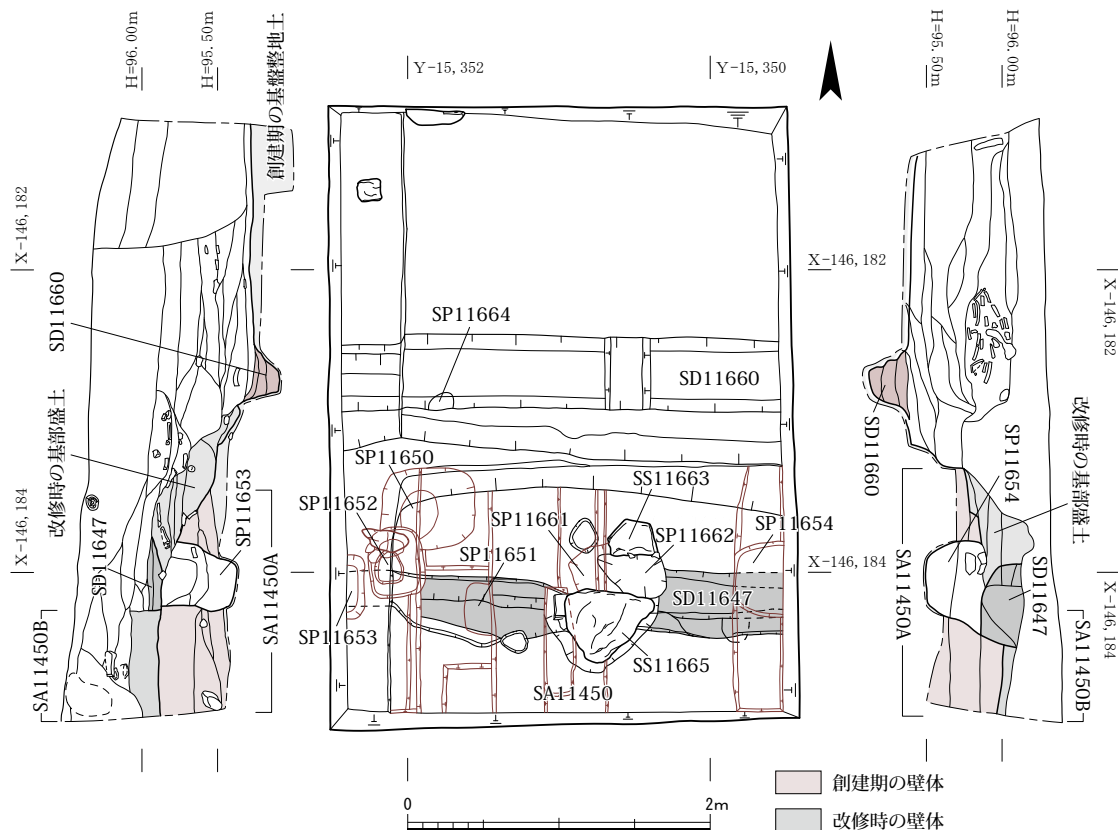
SA11450B を改修した築地塀 SA11450C は、後述する礎石 SS11665 に寄柱が立つとみられる。この礎石の北面と SD11647 の中軸がほぼ揃うことから、SA11450C は SA11450B とほぼ同規模と考えられる。

柱穴 SP11650 黄橙色砂質土上面で検出した柱穴。掘方は隅丸方形で一辺約 60cm、抜取穴の直径は約 40cm、残存深さは 35cm ほど。柱穴の断面はほぼ垂直となり、掘方からも抜取穴からも遺物は出土しなかった。創建期の南面築地塀の寄柱または添柱の柱穴とみられる。

小穴 SP11664 SD11660 の溝肩で検出した。直径約 15cm。穴底の標高は SD11660 の底面とほぼ揃う。創建期の築地塀造営にともなう足場穴の可能性がある。

柱穴 SP11653 調査区の西壁際、築地塀の基部に積み足した土や後述する SP11652 よりも下層で検出した柱穴。直径約 45cm、残存深さ約 50cm。鎌倉時代～室町時代の土器が出土した。調査区東辺で検出した柱穴 SP11654 と東西に並ぶ。数度の改修の中では、早い段階の遺構とみられる。

柱穴 SP11652 調査区西辺で検出した柱穴。直径約 45cm、残存深さ約 30cm。掘方の中心には径約 20cm の柱痕跡がみられた。掘方の北壁に沿って拳大の石を 3 石並べ、その上に長辺約 25cm、短辺約 10cm の平行四辺形の石を積む。柱の転倒防止用の押さえの石とみられる。掘方の掘られた時期は東



第 23 図 640 次南区遺構平面図・土層図 1:50

西溝 SD11647 よりも古い。調査区中央で検出した柱穴 SP11661 と東西方向に並ぶ。

柱穴 SP11651 調査区西より、東西溝 SD11647 の下層で検出した柱穴。断面観察で掘方と抜取の痕跡を確認した。直径約 35cm、残存深さ約 40cm。築地塀 SA11450B の寄柱の柱穴とみられる。

東西溝 SD11647 基部の盛土上面から掘り込まれている東西溝。この東西溝の南側に中世以降の築地塀の壁体があり、東西溝 SD11647 は、SA11450B の基礎の石列の抜取溝の可能性がある。

礎石 SS11665 近現代の遺物包含層を除去したところで検出した、長径 60cm 程度の片麻様花崗岩の礎石。礎石掘方の下層に東西溝 SD11647 が重なる。北側に径約 45cm の柱穴 SP11662 と小礎石 SS11663（長辺約 30cm）があり、築地塀 SA11450C の寄柱および控柱にともなう遺構とみられる。625 次南区で確認した SX11442、SS11445 と一連の遺構になる可能性が高い。

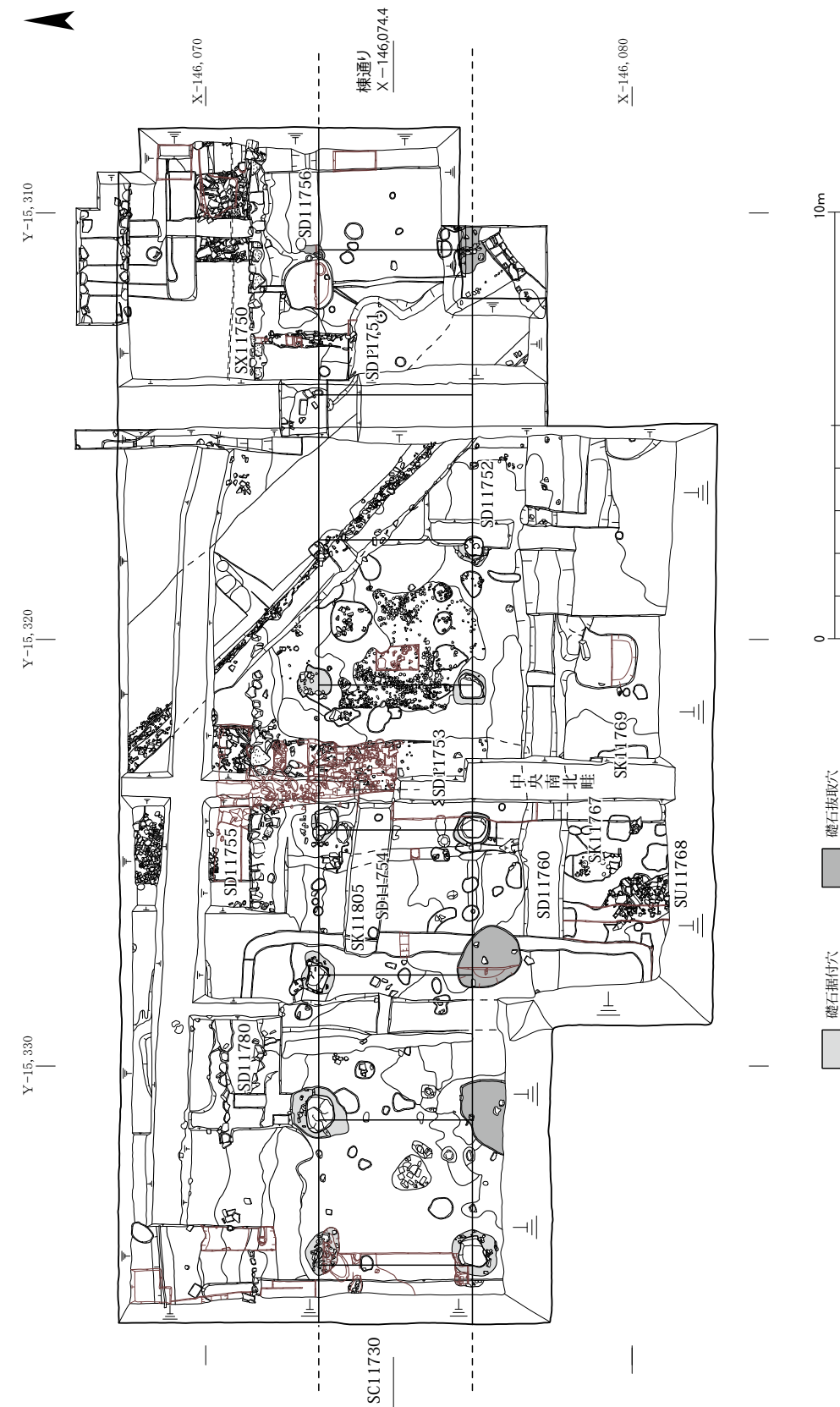
東西溝 SD11660 築地塀の北側を通る東西溝。溝底は東から西にむけてゆるやかに下がる。溝の幅は約 35cm、残存深さは 25 ～ 30cm。溝の埋土には多量の炭を含み、奈良時代から平安時代にかけての土器が出土した。なお、625 次南区では、この溝の延長上にあたる位置で平安時代の石組溝 SD11446 を検出している。

v 649 次調査区（北面回廊）

北面回廊 SC11730 東西約 28m にわたって北面回廊を検出した（第 24 図）。13 ヲ所で礎石やその据付穴・抜取穴を検出し、桁行 7 間分を確認した。便宜上、調査区西端の柱位置を基点とし、柱筋ごとに西から北 1・北 2・北 3、南 1・南 2・南 3 と呼ぶ。このうち、北 2・3・4 と、南 1・4・5・6 の計 7 ヲ所には礎石が残存していた（第 28 図）。ただし、北 4 の礎石は破損しており、原形をとどめていない。7 基の礎石のうち、北 2・3・4 と、南 4 の計 4 基は既往の調査（『防災報告』）で確認していたもので、今回の調査で新たに検出した礎石は南 1・5・6 の計 3 基である。残り 6 ヲ所の礎石は抜き取られていたが、北 1・5 の 2 ヲ所で据付穴と根石を検出し、北 8 と南 2・3・8 の 4 ヲ所で抜取穴を検出した。検出した礎石やその据付穴・抜取穴の柱位置から、北面回廊は梁行 1 間の単廊で、柱間寸法は桁行約 3.3 m（11 尺）で等間、梁行約 3.6 m（12 尺）となる。棟通りは X-146,074.45 付近で、東金堂の北側に残る北面回廊礎石間の棟通りの数値とほぼ合致する。

礎石は直径ないし一辺が 50 ～ 80cm で、厚さは 30 ～ 50cm。石材は北 2・3・4 と、南 4・6 が安山岩、南 1・5 が花崗岩であり、いずれも柱座をつくらない自然石が用いられていた。一部の礎石には被熱痕跡があり、南 4 には被熱痕跡が直径約 36cm（1.2 尺）の円形部分を除いて確認できたことから、径 1.2 尺の円柱が立った状態で被災したことが判明した（第 26・27 図）。礎石の上面の標高は、北 2 は 95.7 m、北 3 は 95.6 m、南 1 は 95.7 m、南 4・5・6 はそれぞれ 95.6 m である。礎石上面の標高は既往の調査（『防災報告』）で判明している北面回廊の成果と同じである。新たに確認した礎石のうち、南 1 の据付穴の検出高は標高 95.5 m で、回廊基壇積み足し土上面で検出した。一方、南 5・6 の据付穴の検出高は標高 95.4 m で、回廊基壇土上面で検出した。

断割調査をおこなった北 1 の礎石据付穴は長径約 1 m の楕円形で、深さは約 30cm、埋土は灰黄褐色砂質土と褐灰色砂質土で、径 10 ～ 20cm の根石が残存する。根石にはチャートや片麻岩、安山岩、花崗岩などが使われていた。出土した遺物は、奈良時代から鎌倉時代の土師器、須恵器甕、瓦器の皿・碗や中世の軒丸瓦などである。同じく断割調査をおこなった、回廊基壇積み足し土上面で検出した南 1 の礎石据付穴は、埋土が灰黄褐色砂質土とにぶい黄橙色粘質土で、土器片や砂利片を含む。埋土の

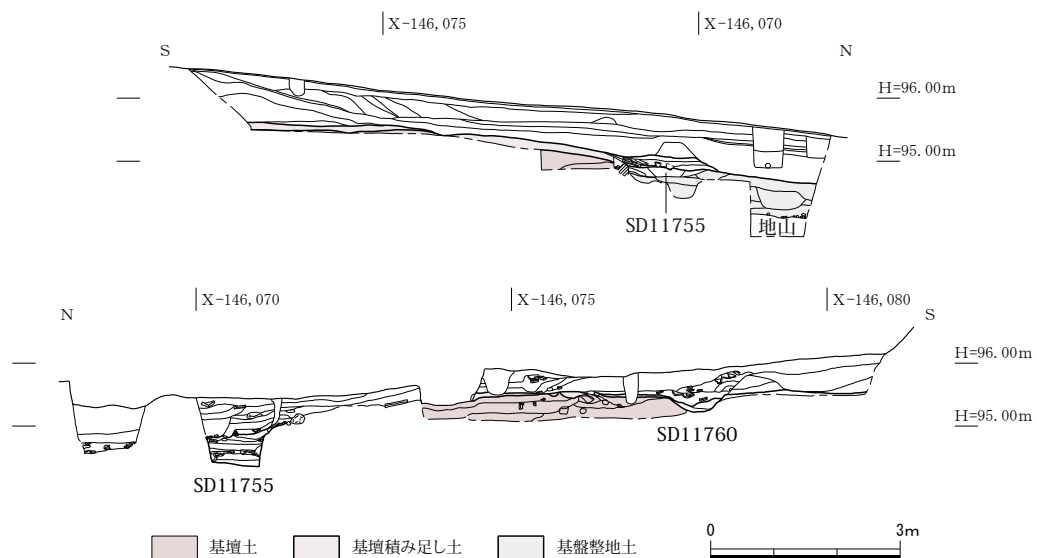


第 24 図 遺構平面図 1:150

灰黄褐色砂質土には 10 ～ 20cm 程度の奈良市地獄谷付近に産する流紋岩質溶結凝灰岩や花崗岩を含む。

なお、回廊基壇積み足し土を一部除去した回廊基壇土上面でも礎石据付穴・抜取穴の検出を試みたが、回廊基壇土上面では重複する位置で据付穴・抜取穴を検出できなかった。以上のように、回廊基壇積み足し土上面と回廊基壇土上面で据付穴・抜取穴が重複しないこと、回廊基壇積み足し土上面と回廊基壇土上面それぞれにおいて、他の場所で据付穴・抜取穴を検出できなかったこと、据付穴の埋土に奈良時代から鎌倉時代の土器や瓦を含むこと、根石に凝灰岩が使用されていることなどから、礎石は創建当初の位置をほぼ踏襲して据え直された可能性がある。

基壇 創建期の基壇は、基盤整地土の一部を基壇土として削り出し、回廊中央では基盤整地土の上に黄橙色粘質土の基壇土を積んで構築する（第 25 図下）。黄橙色粘質土の基壇土は調査区中央で約 10cm の厚さを確認した。掘込地業および版築がおこなわれた形跡はない。また、調査区中央から西にかけて、部分的に 5 cm 程度、褐灰砂質土によって基壇土の積み足し、補修をおこなった痕跡を確認した。基壇土上面の標高は後世の削平を受けているため、南側柱筋付近で 95.2 ～ 95.5m、北側柱筋付近で 95.1 ～ 95.4m と幅があり、特に北側で基壇土の流出、削平が著しいと考えられる。残存する基壇の高さは、北側が基盤整地土上面（標高約 94.6 m）から 50cm 程度、南側が基盤整地土上面（標



第 25 図 調査区西壁（上）・中央南北畦（下）土層図 1:120



第 26 図 回廊礎石と基壇断割（西から）



第 27 図 礎石に残る円柱の当たり痕と被熱痕（北から）

高約 95.5m) から 10cm 程度。

基壇の北辺で長辺 30cm 程度の石を 3 段積んだ乱石積基壇 SX11750 を (第 29 図)、南辺で後述する素掘りの南雨落溝 SD11760 を検出した。基壇の南北規模は約 6.6 m (22 尺) を測る。北面回廊 SC11730 の北側柱筋から乱石積基壇の外縁までの距離は約 1.6 m (5.5 尺)、南側柱筋から南雨落溝 SD11760 の北の立ち上がりまでの距離は、約 1.4 m (4.5 尺) である。軒の出は、南が約 1.4m、北は北雨落溝 SD11755 の南の上端までの距離が約 1.6 m であることから、それ以上と考えられる。

乱石積基壇 SX11750 を構築する石材は奈良市地獄谷付近に産する流紋岩質溶結凝灰岩や二上山から屯鶴峯に産する流紋岩質凝灰角礫岩、安山岩、花崗岩など多様な種類を用いており、安山岩が最も多い。また、基壇外装に転用されたとみられる凝灰岩切石と安山岩や花崗岩などの自然石が混在することから、この乱石積基壇外装 SX11750 は奈良時代の創建当初のものではなく、創建当初の位置を踏襲しながら平安時代以降の度重なる東金堂院の罹災による被害を受けて再建したものと考えられる。なお、南辺では基壇外装の痕跡を確認できなかった。

調査区東壁で、北側柱筋のほぼ直下に素掘りの東西溝 SD11756 を検出した。溝の幅は約 50cm、深さは約 10cm で、溝の埋土はにぶい黄澄砂質土で土中に径 3cm 程度の礫を含む。SD11756 の西の延長と推測される溝状の遺構を、北側柱筋に沿って北 3 の西側まで断続的に平面で確認した。北 1 から 2 にかけては回廊基壇積み足し土を残した状態であったので、続きを確認できなかった可能性がある。SD11756 は回廊基壇土を掘り込んで構築されていることから、創建期の回廊にともなう遺構であると考えられ、壁持地覆石の抜取溝の可能性が指摘できる。

雨落溝 基壇の北辺と南辺で東西方向に延びる素掘りの雨落溝を検出した。北雨落溝 SD11755 は基盤整地土を掘り込む。北側の立ち上がりが明確でなく、確認できた幅は約 1.2 m 以上、残存する深さは 20 ～ 50cm である (第 25 図)。溝の埋土は下層から炭や焼土を多量に含む層と、瓦を多量に含む層が互層になっている。遺物は主に奈良時代から平安時代にかけての瓦が多量に出土した。SD11755 を埋めて構築された東西石組溝 SD11780 の埋土からは鎌倉時代～室町時代の土師器や瓦器が出土し

ていることから、SD11755 は室町時代にはすでに廃絶していたと考えられる。

南雨落溝 SD11760 は基盤整地土を掘り込む。幅約 70cm、深さ約 30cm、検出した長さは約 13 m である。埋土には焼土が集中して堆積する様子を確認した。溝の埋土から出土した遺物は、古代から中世の土師器、須恵器、瓦器と平安時代の軒平瓦や中世の巴瓦などである。したがって、SD11760 も中世の段階で溝がほとんど埋まった状態になっていた可能性が高い。

暗 渠 回廊基壇を南北に横断する暗渠 4 条 (SD11751 ～ 11754) を検出した。調査区東端で検出した SD11751 は側と底に平瓦を据えた瓦組暗渠で、回廊基壇土と乱石積基壇 SX11750 の裏込土内に敷設されている (第 31 図)。瓦組暗渠の内部の幅 25cm、深さ 10cm。溝底の標高は、南側では 95.1m、北側で



第 28 図 北面回廊検出状況 (西から)

は 95.0m であり、南から北に向かって緩やかに勾配をつけていることを確認した。暗渠内の埋土に焼土を含む。SX11750 の最上段の石の間に出口となる空間を設け、北雨落溝 SD11755 に流れ込むように構築されており、SX11750 にともなう暗渠と考えられる。Y-15315 付近で検出した SD11752 は幅 30cm、深さは 10cm 程度。埋土にこぶし大の石を少量含む。調査区中央南北畦の東側で検出した SD11753 は幅約 1.1 m、深さは 15cm。瓦組で構築される。回廊基壇土の黄橙色粘質土上面の標高 95.4m 前後で検出した。溝底の標高は、南雨落溝 SD11760 との合流地点では 95.3m、北雨落溝 SD11755 との合流地点では 95.0m であり、SD11760 から SD11755 に向かって傾斜をつけて設けられている。複数回の据え直しの後、奈良時代の瓦や石が大量に廃棄された状態で埋まる。北 4 と南 4 の礎石のすぐ西側で検出した SD11754 は幅 30cm、深さ 20cm。底部の標高は、SD11760 との合流地点では 95.4m、北 4 の西側では 95.3m であり、南から北に向かって勾配をつけている。土坑 SK11805 の南壁断面で、回廊基壇積み足し土である褐灰砂質土を掘り込む様子が確認できることから、SD11754 は回廊に基壇土を積み足した際に構築されたと考えられる。これらの暗渠は、暗渠底部の南北で高低差が認められ、回廊基壇土内で南から北へ勾配を付けて構築されていることから、東金堂院内庭の雨水を南雨落溝で受け、暗渠を通じて北雨落溝に排水していたと考えられる。

土 坑 回廊南側にあたる東金堂院内庭の基盤整地土上で、土師器を多量に含む土坑 2 基を検出した。土坑 SK11767 は東西約 0.7m、南北約 1.1m で、埋土に炭を多量に含む（第 30 図）。主に平安時代の土師器が出土した。同じく土坑 SK11769 は、中央南北畦に西半がかかっていたものの、東西約 0.3m、南北約 1.1m 分を確認した。埋土に炭を含む。こちらも平安時代の土師器が出土した。

瓦溜 SU11768 内庭の整地土（褐灰粘質土）中で、東西約 0.9m、南北約 1.6m の範囲に瓦溜 SU11768 を検出した（第 30 図）。瓦を含む整地土は調査区南端まで続き、調査区南壁でも瓦が整地土中に含まれている様子を確認した。瓦は主に奈良時代のものが出土している。



第 29 図 乱石積基壇 SX11750（北西から）



第 30 図 土坑 SK11767・瓦溜 SU11768（北から）



第 31 図 南北溝 SD11751 と乱石積基壇（西から）